

騎空挺の恋愛事情小咄

宇賀神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全編共通してグラン君と女性団員との小咄で、最後にグラン君が悲惨な目に合います。

ペースは遅いですが息抜きにちよこちよこ書けたらいいと思います。

目次

| | |
|----------|---|
| ジータ編 | 1 |
| サラ&ボレミア編 | 7 |

ジータ編

「私達の夢を乗せた騎空艇『グランサイファー』。夕陽を浴びて煌めくこの船は数々な修羅場を潜り抜けて、もう仲間の一人としてカウントしても良いだろう。」

「んう〜」

私は大きく伸びをした。

先日、ファータ・グランデ空域を騒がせた首謀者フリーシアを牢に収監し、エルステ帝国との一件を終えた私達は新たな旅に出ていた。

星の島イスタルシアからお父さんの手紙が届いたのも、ザンクティンゼルにルリアとカタリナが帝国に追われてやってきたのも、今や懐かしい思い出。

「ジータ、今日もお疲れ様」

「あ、グラン」

デッキで黄昏れる私に労いの言葉を掛けてくれたのは、私の双子の弟のグラン。彼は拾い子でも義理でもなく、血の繋がった正真正銘の双子の弟。それだけが悔やまれる。

「あれ、クラリスはどうしたの？ 一緒に日課のスラ爆やってたんじゃ……」

「さあ、もう自室に戻ったんじゃないかな？」

クラリスは私達より2歳年上の錬金術師。色々あつて家を飛び出して来ちゃったんだけど、親御さんとのギクシャクした関係も修復して今では色んな属性パーティに引つ張りだこ。彼女みたいに、グランが団長で私が副団長を務めるこの団には、老若男女種族問わず様々な事情や目的を持った人達が同船している。ちなみにクラリスはスラ爆から帰ってきて、一直線にグランの部屋へ行き夕食の誘いをする息巻いていた。どうやらすれ違いになったらしい。恋愛クソ雑魚錬金術師のことだから、どうせ会っても誘えずに終わるだろうけど。

「そっか。カリオストロからクラリスを呼んでこいって頼まれたんだけど……」

「ちよっとグラン、何で団長が団員にパシられてるのよ」

「しようがないだろ。何か『フェロモン』と『滋養茸』の関連性ってやつの実証実験のために新しい薬を精製してたから手が離せなかったんだってさ」

「へー……」

それ絶対媚薬じゃん。後でその話は詳しく問い質すとして、あわよくばそれをクラリスに渡す前に私がゲットしよう。

「……それにしても、こうして二人きりになるのも久しぶりだね」

「言われてみれば確かに。最近はずーんさんかナルメアさんのどちらかが必ずいたし」

「今もどこかで見られてたりして」

「ソーンさんならありえそう。まあ見られてやましいことしてるわけじゃないし、別に良いけどね」

「あーあ、遂にグランが女の子に視姦される喜び知っちゃったかあー」
「視か……ええ……?」

「島を出る前は、見られるのが恥ずかしいから一緒にお風呂すら入ってたがらなかったのになー。悲しいなー」

「そ、それは誤解だよ！ アーロンに聞いたけど僕たちの歳で一緒にお風呂に入るのはおかしいことだって聞いたから止めてたんだって！ それに、別に僕だって四六時中見張られるのが好きなわけじゃないし！ プライベートな時間だってちゃんと取ってるし！」

「プライベートな時間ねえ……。私とこうして二人きりになるのも久しぶりなの？ 本当にプライベートな時間取れてるの？ 最近一人で外出したのはいつ？」

「う、それは……」

グランは口を閉ざしてモゴモゴさせた。

ほーら見る。グランは根っこが優しいし、人に頼られることが少なかったからちよつとお願いされただけで二つ返事で了承するチョロさ——もとい危うさがあるのに自覚がない。それに、百数人の騎士を束ねる団長だからって肩肘張って、やれ訓練だの、やれ仕事だの、やれ団員とのコミュニケーションだの一人でいるのはお風呂に入るときか寝るときだけなのも知ってる。

何なら寝る時間すら削っていて、今も目の下にクマができています。
ん。

(……島さえ出なければなあ)

そう、島さえ出なければ、グランがルリアに着いていこうとしなければ彼がこんなにも憔悴することも無かった。私達はずっと二人きり(ビィ除く)であの家にも愛の巣を築けていた。

それなのにこんなにも多くの想いや業を背負って、やつかまれて、裏切られて、事件に巻き込まれることもなく。

何も起こらなければ、慎ましく平和に夫婦生活を営めただろうに。それもこれも全て――。

(全部……私が間に合っていれば……)

私はあの日、いつもと変わらずグランを守るためにお婆さんと鍛錬してクラスⅣの極意を仕込んでもらっていた。そのせいで私はグランを守れなかった。本末転倒だ。

轟音と振動を島に響かせて墜落した一つの小さな騎空艇。それを追ってきた帝国。怯える村人の代わりに私と村長が帝国兵と話し合いをしていた時、慌ただしく彼らは森に走っていった。

それを追跡した時には既に、何もかもが遅かった――。

グランがルリアを庇ってヒドラに殺された時の事は何も覚えていない。頭が真っ白になったから。気づいたら足元にはヒドラの血溜まりができていて、帝国兵とそれを引き連れていたポンメルンは逃げてしまった。

あの時、私がグランよりも早く一目散に墜落現場に走っていれば、グランが死ぬことは無かったのに――。

(いや――)

いや、そもそもルリアとカタリナが脱走なんて考えないでそのまま牢に繋がれて、ザンクティンゼルに来なければ――。

「ッ！」

「ジ、ジータ？ 急に頭振ってどうしたの!？」

「へドバンしたくなかったの」

「横に頭を振るのはへドバンじゃないんじゃ……」

私は何を考えたんだ。ルリアさえいなければ、カタリナさえ変な気を起こさなければ、そんなどす黒い感情に掻き立てられたって全部過ぎたこと。それにルリアもカタリナも悪くない。悪いのはルリアを悪用し、星晶獣を従えて全空の覇権を握ろうと野心を燃やしたエルステ帝国幹部であり、私欲のためにアーカーシヤを起動して自国民を犠牲にしようとしたフリーシア宰相なのに。グランは優しかったからオーキスちゃんに感化されてフリーシアを許しちゃったけど、私はまだ許してないからね。あとポンメルンも良い人ムーブしてるけど、次会ったら八つ裂きにするって決めてるから。

でもやっぱり、感傷に浸ると「たられば」は考えちゃう。

「ねーグラン」

「な、何？」

「私時々考えるんだ。もしもルリアとカタリナが帝国に追われて私達の島に来なかつたら、今頃どうしてたんだろうって」

「うーん、そうだなー……」

グランはひとしきり悩んだ後、ポンと手を叩いて一人で納得していた。

「やっぱり空に出てたと思うよ。きっかけはルリアと命のリンクを繋いだからかもしれないけど、僕は父さんからの手紙があったから島を出ようって踏ん切りが付いたんだ。最後の最後に僕の背中を押したのは、星の島から届いた父さんの手紙……遅かれ早かれ僕は空に飛び出してたよ」

「そっかー。グランは昔からきかん坊のやんちゃボーイだもんね。おまけに人から影響受けやすくて何でもかんでも流されちゃうし」
「僕はそんなこと無いと思うんだけどなあ」

「お父さんの手紙を読んで『空に行きたい！』って息巻いたのにな？ 流されやすい証拠だよ」

「さ、最近僕だって考えながら年上の人達の言うことに耳を傾けるようにしてるよー！」

「例えば？」

「ええと、イルザさんから『睡眠は大事だ』って口を酸っぱくして言わ

れたから一緒にリラックス効果のあるお香買いに行つたし、ヘルエスさんからは『もつと体を労りなさい』つて言われたから羽毛布団を一緒に選んでもらつたし、シルヴァさんには『魔物によつて弾の種類は選ぼう』つてアドバイスされたからクムユやククルと一緒に特性の弾を作つたり……」

「はっ？」

案の定、グランはアドバイスを全て聞き入れて流されまくつていた。なーにが「考えながら耳を傾けている」だ。何も考えていないではないか。

しかも彼の話に登場するのはラクムやオイゲンさんなどの身近な男性陣ではなく、なぜか途中から旅に加わつた妙齡の女性で、グランに色目を使つてる女ばかり。最後はともかく歳の差を考えてほしい、歳の差を。

「ジータ……？　なんか急に眼が据わつただけ……やっぱリアルかな、自分でも思つただけど僕の流される癖つて治つてないかな……？」

「え——あ、う、うん。そうかなー、やっぱりグランつて流されやすいから気をつけて欲しいなー。そんなだと、子供組からも何かおねだりされたらすーぐ買い与えちやいそうで心配だよ。何でもかんでも買い与えると教育に悪いつてネネさんとアギエルバさんから聞いたし」

「べ、別にいいだろ！　大体、あれこれ僕に指摘してたけど、よくよく考えたら僕もジータもまだ子供じゃないか！」

「えっ!?　私と子供を作りたい!?　(難聴)」

「え——」



「もう出ないよお……」

「大変だあ！ グランがジータにレ○プされちゃったあ！」（クソデカ
大声）

サラ&ボレミア編

私の部屋に二つの吐息。一つは私で、一つは団長さん。

「団長さん……」

「サラ……」

私達はベッドの上で向かい合い、抱きしめ合う。

あの忌々しい島で《砂神の巫女》として崇められていた私は体のいい操り人形だった。信じていた人に裏切られ、守っていた人から忌避され、生まれて初めてこの島を滅ぼしたいと願った私を救い、砂縛から連れ出してくれた愛しい人——。

けれど私は入団してからしばらくの間、ボレミアやルリアに色んな迷惑をかけてしまった。当時の私は不眠症で精神が不安定だったの。初めて得られた自由が、ずっと欲しいと願っていた友達ができて舞い上がったのも束の間。もしかしたら全てが夢で、一度眠って目が覚めたら、何もかも露と消えてしまっているような気がして。

沸き立つ不安から眠れない私を見かねた団長さんが、私を安心させるために定期的に適度なコミュニケーションを取ってくれたのが事の始まり。このハグもその延長線上で、渋い顔をしていた副団長さんも理解を示してくれた。

「サラ、落ちついた？」

「は、はい……。少しだけ……」

団長さんとのハグの時間は何物にも代え難い至福の時間。

私達の関係を知らない人が見たら勘違いされそうなシチュエーションだけど、悲しいことに一度もそういう関係に発展したことはないの。この団にいる騎空士さんはみんな優しい人ばかりで、わざわざケアの時間を邪魔しに来ようなんて思わない。団長さんに似て優しい人達ばかり……きつと団長さんの人柄に惹かれたんだろうなあ。

（団長さん……）

薄い布越しに程よく筋肉の張った胸板に顔を擦り付けて、男の人の

——団長さんの匂いをいっぱい嗅ぐ。

「ハアアア……」

鼻を抜けて頭の深いところまで団長さん一色に染まり、辛かった過去を忘れて充足感に満ち溢れる。至福の一時――。

ふしだらな女って思われちゃうかもしれないけど、優しい団長さんは絶対にそんなこと思わない。子供の特権として甘えられるだけ甘える。頭にかかる団長さんの吐息も、心地よく響く心音も、優しく抱擁してくれる手も、今だけは全部私の物。ボレミアも、副団長さんも、ルリアも、ジンさんも、誰も手を出せない。

誰も手を出させない。

私と団長さんしか許されない幸せに包まれた空間――。

(団長さん……団長さんツ……♡)

マナウイダンを封印した後死ねば良かったんだと自棄になった私を、世を疎んだ私を救ってくれた王子様。あの忌まわしい島から連れ出してくれた、私の、私だけの王子様――。

「大丈夫だよサラ、僕はどこにも行かない。ジータだって、ボレミアさんだって、グラフィオスだっている。ここがサラの帰る場所だよ」

「あ、あの……じゃあ一つだけ我が儘良いですか……？」

「ん……言つてごらん」

「もつと……もつときつく……抱きしめてください……。」

「わ、分かった……。痛かったら言つてね」

団長さんは戸惑いながらもリクエスト通り私を強く抱きしめてくれた。

「うっ……フツ……」

腰と胸が痛くなつて少し息が苦しくなるけれど、凄く、凄く、すつごく幸せ――。

このまま続けたら腰回りに赤い跡が付いちゃうけれど、それを見る度に今日のハグを思い出せるからいいの。できた跡は団長さんの所有物になった証。絶対に私を掴んで離さない。何処にも、誰にも渡さない。私はこの人の所有物なんだって、そう思わせてくれる大切な大切な証――。

「団長……さん……♡」

私もきつく抱きしめ返す。団長さんの鼓動と早鐘のようになった

私の鼓動が重なって互いに打ち付け合う。

(今日こそ……今日こそは……)

気分の高まった私は常日頃から立てていた計画を実行に移すときが来た。

私は団長さんに依存している。私は団長さんから離れられない。けど団長さんは違う。私を裏切るようなことはしないけれど、やむにやまれない事情ができて、そっちを優先しちゃうかも知れない。だから、これからは団長さんが私を離さないようにしなくっちゃ。

——けどその前にやる必要がある。

「……ボレミア、良いよ」

扉の向こう側に呼びかけると、申し訳なきようにボレミアが出てきて後ろ手に扉の鍵を閉めた。実は私知ってたの、ハグする習慣が始まってからずっと羨ましそうな視線を向けていたのを。ボレミアは勘が鋭いからすぐに気づいちやっただね。

「ボ、ボレミアさん？　なんでここに……ていうか何で鍵をかけたんですか？」

「……知っていたのか」

「うん。本当は一人でしたかったけど……ボレミアだけは特別だよ」

「ありがとうサラ。……済まないグラン、私ももう限界なんだ」

ボレミアが、私を助け出してくれたグランに感謝してるのを知ってたし、抱いていた信用が恋慕の情に発展していったのも知っている。本当は……本ツ当は嫌だけど、ずっと私を守ってくれていたボレミアにも恩返ししてあげないと。だからボレミアだけは特別。それにボレミアがいたら楽に押し倒せそうだったし。

「え、二人とも何の話をしてるの？」

「グラフオス、見張りをお願いね」

「君が悪いんだ……全部、何もかも受け入れてくれる優しい君が……」
「ちよ、ちよつとサラ？　なんでグラフオス出してるの……？　ていうか二人とも目が据わって——」

拙いけれど精一杯ご奉仕します。私の、私達の王子様——♡



「もう出ないよう……」

「な、なんてこった！ グランがサラとボレミアをレ○プしちまっ
たア！」（ボレミアからもらった林檎を食べながら）